

JAPAN.

OTHER CITIES: THE MOST
MAIN ISLAND BETWEEN
ASCENTS OF THE
AND DESCRIPTIONS
HISTORICAL NOTES
AND LEGENDS.

著者 謝野 和 氏
BY
ERNEST MASON SATOW,
SECOND SECRETARY AND JAPANESE SECRETARY TO HER
AND
LIEUTENANT A. G. S. T.
ROYAL MARINES (RETIRED)

KELLY & Co
YOKO



ish
on the
ity to his
a hole in the floor.
ustom, and the smoke
s best it could. But there
of it; usually, indeed, there is
the gloom above. It was twilight in
carcoal is the common combustible,
on hung, by iron bars jointed together,
e room. Already the day without was fading
ing fast, and even at high noon, none too
much of it could find a way into the buildi
now half buried under the snow. A
watchman sat muffled in shadow c
ther side of the fire. He made
known, from time to time, by
pathetic gutturals, which
bit of charcoal, which
bers with a

第17回企画展

異人たちが訪れた立山カルデラ

—立山新道と外国人登山—



立山カルデラ砂防博物館
TATEYAMA CALDERA SABO MUSEUM

はじめに

明治初年に開通した立山新道を一つの契機として、多くの異人たちが立山カルデラに調査や探検で訪れている。この新道は、かつて武将・佐々成政が、厳冬期に越中から信州へ通り抜けたとされる間道を拡張工事したものであり、それは当時の北アルプスにおける壮大な事業であった。立山における外国人登山は、明治8年(1875)のガウランドが嚆矢であり、翌年にはナウマンが立山周辺の地質調査を行っている。その後も異人たちが立山カルデラに訪れ、詳細な紀行文を通じて、立山周辺の山岳美を海外の人々に紹介した。

立山では、それまでの敬虔な信仰登山が依然として残りつつも、山岳に対する捉え方、登山における目的意識が大きく変化していく。日本人による研究登山や測量登山が開始され、立山は霊的修行の場から研究対象として捉えられるようになる。こうした新たな登山の気風を異人たちがもたらしたのである。

今回の企画展では、立山新道関係史料と異人たちが立山カルデラをどのように記録したのかを紹介する。特に、海と山を結んだ立山新道の歴史を振り返り、その意義を考えたい。さらに、異人たちの記録を通して、調査・研究対象としての立山カルデラについて再考する機会となれば幸いである。

立山カルデラ砂防博物館

目次

立山カルデラと北アルプス	2
立山登山案内図にみる立山新道	4
はじめに、目次、凡例	6
立山新道関係史料	7
解説 山の夢、立山新道—開通社の成立と瓦解—	12
異人たちが訪れた立山カルデラ	17
解説 明治初期の外国人登山とその周辺	32
信仰の山へ「近代」を運ぶ—明治初期、外国人の立山・針ノ木峠—	32
サトウの『中部・北部日本旅行案内』からチェンバレンの『日本旅行案内』へ	36
P・ローエルの「NOTO」と芦峯	38
立山・針ノ木峠とウェストン	40
付表 ウェストン顕彰碑等一覧	42
明治初期の外国人登山に関する年表	44
外国人による立山登山の行程・アクセス表	45
展示資料一覧	46
参考文献	46
おわりに 謝辞	48

凡例

1. 本書は、立山カルデラ砂防博物館が、平成18年7月22日から8月31日まで開催する第17回企画展「異人たちが訪れた立山カルデラ—立山新道と外国人登山—」の展示解説書である。
1. 本企画展は、当館学芸課主任高野靖彦が企画立案した。企画展開催のための諸準備については、高野を中心として行ない、当館学芸員丹保俊哉がカシミア3Dによる鳥瞰図・動画を製作した。
1. 本書の執筆と編集は高野靖彦が担当し、編集については大東印刷株式会社の協力を得た。尚、本書解説「明治初期の外国人登山とその周辺」は、布川欣一氏、高成玲子氏、牧野弥一氏、田畑真一氏に分担執筆していただいた。
1. 本書掲載の図版は、展示資料の配置順序とは一致していない。また、本書掲載のない展示資料も、展示にない資料の本書掲載もある。
1. 資料の中には綴物であるが、便宜上、横つなぎで掲載したものもある。
1. 資料の所蔵先は図版名に併記した。特に記載のない資料は当館所蔵であることを示す。

異人たちが訪れた立山カルデラ

1. 明治初年の内地旅行

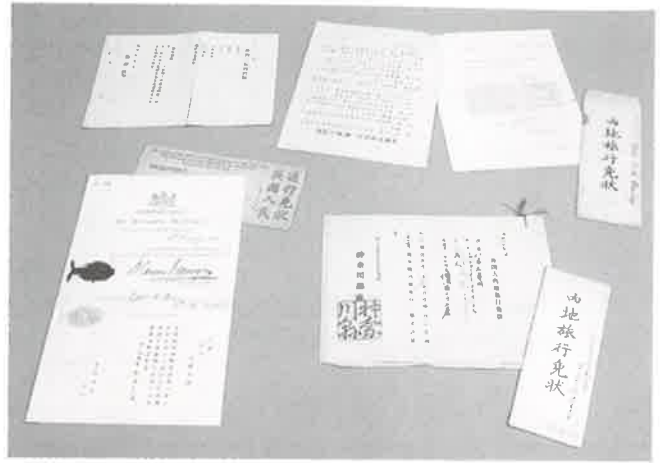
異人たちが、日本各地、さらに立山に訪れるようになった背景として、内地旅行制度の整備がある。そもそも日本国内の旅行の制限は、安政5年(1858)の「日米修好通商条約」などの欧米諸国との条約が発端であった。外国人はこの条約下で、開港された5港(横浜・函館・神戸・長崎・新潟)の開港場、そこから10里四方の範囲内と定められた「遊歩区域」のみ立ち入ることが許された。例外として、外交官は制限対象外とされ、公使・領事は、職務遂行のため日本国内を旅行する権限を認められていた。したがって、「遊歩区域」を越える区域が「内地」であり、そこを旅行することを「内地旅行」と呼んだ。

開港当初より、内地旅行を希望する外国人たちの要望は多かった。そこで、日本政府は温泉療養という目的に限り、許可書を発行した。明治5年(1872)には、政府のお雇い外国人に許可されていた内地旅行を一般の雇い外国人にも適用し、「雇入及通行免状」を発給した。しかし、翌年には各国の公使連名で、国内旅行の自由化を認める旨の要求書を外務卿に提出した。政府は対応をせまられ、まず明治7年(1874)に「外国人内地旅行允準条約」を定め、内地旅行の許可基準を改めた。翌年には、「外国人旅行免状」を外務省から発給することが決定した。その制度は、病氣療養・学術実地調査・測量や観測・遭難者の救助等に対し、1回のみ免状を発給するものであった。ここから、一般外国人の旅行許可書は「外国人旅行免状」に統一されたが、旅行毎に申請する必要があった。

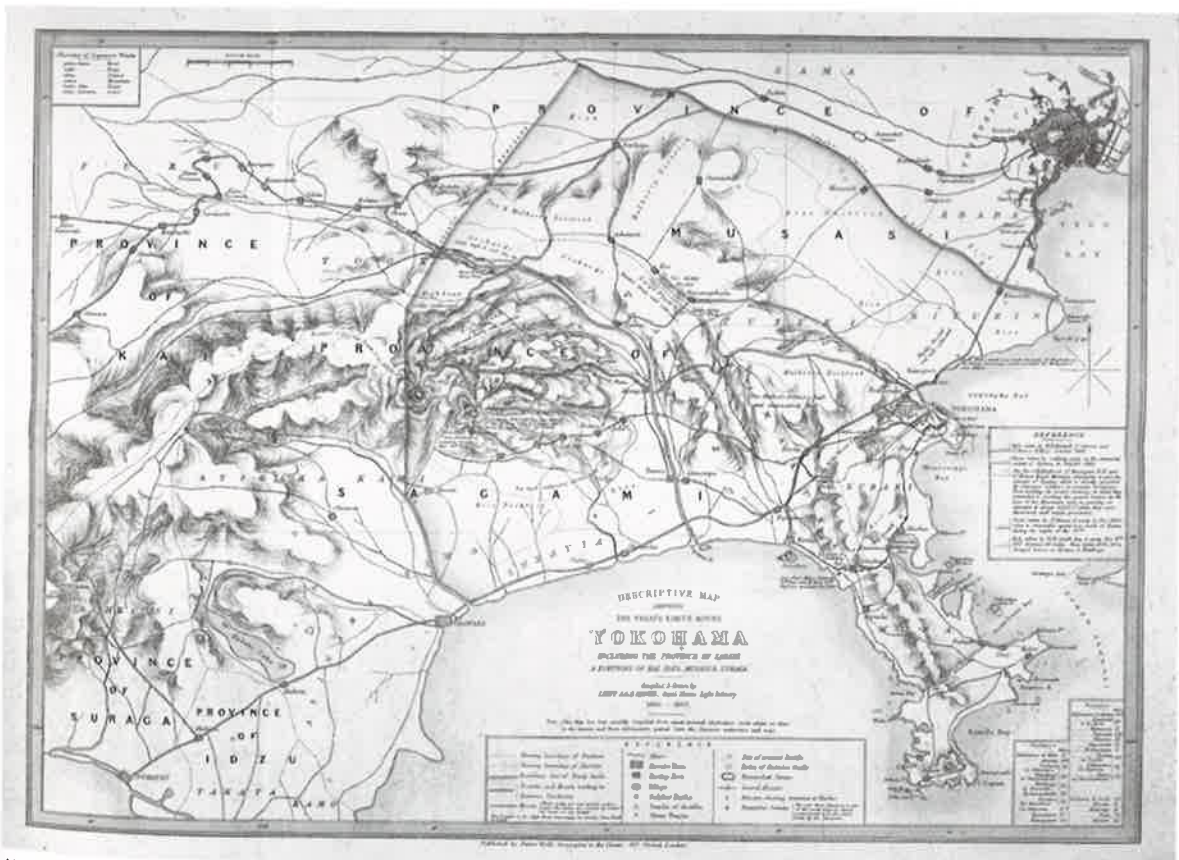
当初、内地旅行の免状交付は比較的緩やかで、旅行制

限の取り締まりも厳密ではなかった。明治12年には、内地において病氣他やむをえない理由があった場合に限り、旅館以外で宿泊も可能となった。しかし、明治20年代には、旅行者の長期滞在などのルール違反が問題化し、取り締まりが強化された。

こうした内地旅行をめぐる双方の駆け引きは、明治27年(1894)の「日英通商航海条約」の締結をもって、終焉を迎える。この条約改正では、領事裁判権が撤廃され、そのひきかえに外国人は国内を自由に旅行できることとなった。新条約は、その5年後に発効し、外国人居留地や内地旅行制度といった、それまでの旧制度の廃止を意味していた。



外国人内地旅行免状 横浜開港資料館蔵



横浜周辺外国人遊歩区域図 慶応4年頃 横浜開港資料館蔵

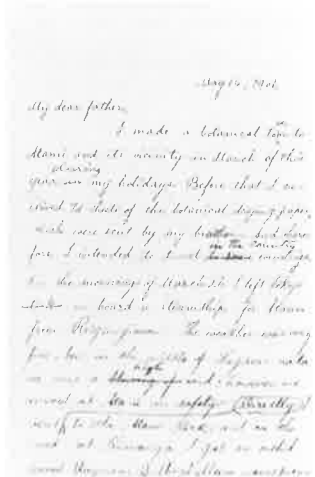
●サトウゆかりの品々



サトウの書簡 横浜開港資料館蔵

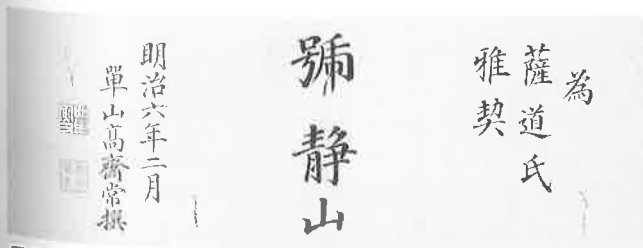


サトウ専用のトランク 横浜開港資料館蔵

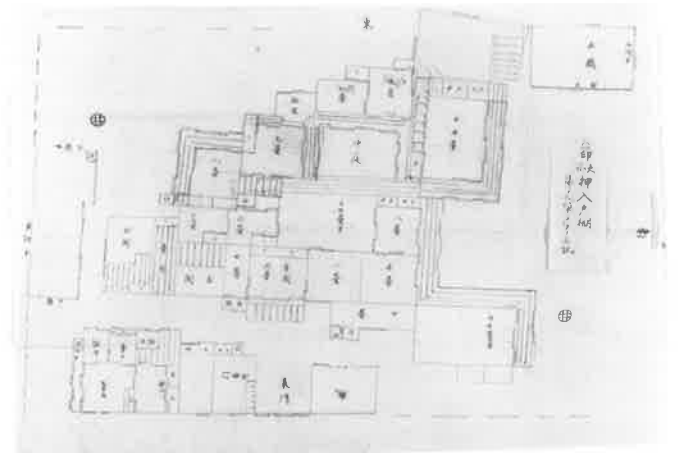


サトウが子・久吉に宛てた書簡 明治38年 横浜開港資料館蔵

明治6年（1873）からの住まい。
2階建ての木造瓦葺きの日本家屋で建坪は105坪。敷地内には2階建ての蔵や長家があった。明治17年（1884）サトウは富士見町へ移転した。



号牌 明治6年 横浜開港資料館蔵



飯田町屋敷図面 横浜開港資料館蔵



サトウ家旧宅（飯田町）横浜開港資料館蔵



国土交通省木曾川下流工事事務所蔵

ヨハニス・デ・レイケ

1842～1913 オランダ人 土木技師

1873年（明治6年）に4等工師として初来日し、30年間にわたって日本各地の治水事業に携わる。来日翌年、エッシャー技師と淀川改修工事を指導。その後、木曾川の改修工事をへて1891年（明治24年）に富山県の河川を視察した。8月に常願寺川下流部及び水源部を調査し、合口用水化、分流、霞堤採用による改修工事を計画した。長年の功績が認められ、勲二等瑞宝章（1902）、オランダ国王から獅子勲章（1911）を授与される。

●デ・レイケが見た立山カルデラ

「県のひと達が今日は私にうるさく逆らって、私がこの前の旅の話の続きをほんの少し話そうとするのも、承知しませんでした。今はもう晩で、課あのごわめく音のほかはうるさい音は何もありません。そして、ちっとも暑くなくて、温度は76°F [24.4℃]です。Cobaは私のそばで本を読んだまま眠っています。ランプも良いし、机も椅子も、寝台も県庁の新しい寝具も皆、この山の中まで引っぱり上げられたのですが、すべて具合が悪くありません。多枝原の温泉場までの旅は前便に書いたとおりです。ここの浴場の上に掛かっている小舎も私達が気持ち良く泊まった山小屋も、鍋のような形の谷の底にあって、その谷も高く切り立った山々が丸くとり囲んでいて、その度に雨が降っているようです。この温泉宿は海よりも4,000ft [1,219m]より少し高いところで、ここはすぐそばには荒廃した溪流があり、また、対岸には壁のような山から空中に崖がせり出しています。何百回も折れ曲がるつづら折りの道がその岩壁に造られていて、ところどころには2本の長い木とたくさんの横木とで棧道が造られています。多枝原からもっと先に行くには、そこを通らねばなりませんでした。」

「気圧計は私達がもう6,081ft [1,853m]のところ、つまり2,080ft [634m]登ったところにいることを示してい

ました。それは鍋の縁に当たるところで、もとは噴火口のへりだったものと見えます。近くを見ると、あちこちに水蒸気が吹き出っていて、ちょうど蒸気船を見るようでした。」

（井口昌平訳「百年前にデレーケが立山に登ったときの日記風の手紙」より）

デ・レイケは明治24年8月12日、富山を出発し、13、14両日に立山温泉に宿泊。翌日、立山カルデラ内を視察している。3時間かけて松尾坂を登り、地獄谷を見学し、雷鳥沢から室堂に至った。同所で一泊し、翌朝から雄山山頂に登り、称名川沿いを下り芦峯寺で宿泊。17日に駕籠と人力車を乗り継いで、夜遅く富山に戻っている。同行者は13歳の娘ヤコバの他、高田雪太郎らの県職員、通訳、登山案内人、調理師、黒田写真師等、総勢約25名だったようである。ヤコバは語学に大変堪能であり、通訳として同行したとみられる。立山温泉では、ランプや机、椅子、寝台を運び込んでもらい、温度が76°F (24.4℃)と快適であると述べている。随所に温度と高さ（フィート）が書きこまれているのが特色であり、松尾峠から立山カルデラを望み、周辺の火山活動について言及している点は興味深いものがある。



現在の湯川沿い噴泉



刈込池

明治初期の外国人登山に関する年表(1860～1894年)

西暦	和暦	外国人による登山史及び関連記事	日本近代登山史及び関連記事
1860年	万延元年	7. 英国公使R. オルコックら8名(役人、従者など100名余り)による富士山登山。(外国人富士山初登頂)	
1866年	慶応2年	8. スイス総領事ブレンワルト他3名による富士山登山。9. アメリカ隊(一部の公使館員)が富士山登山。	
1867年	慶応3年	7. 英国公使R. オルコックら8名(役人、従者など100名余り)による富士山登山。(外国人富士山初登頂)	幕府開成所から伊能忠敬の小図を元に作成された「官板実測日本図」が刊行。
1871年	明治4年	4. ベイヤード大尉(イギリス)が残雪期の富士山登山。	名取直衛(芦安村村長)が北岳の登拝路を復興整備。
1872年	明治5年	7. 英国公使R. オルコックら8名(役人、従者など100名余り)による富士山登山。(外国人富士山初登頂)	5. 明治政府が山伏・修験道禁止令を發布。山岳での女人禁制撤廃令を發布。
1873年	明治6年	W. ガウランドとその上司ディロンが御嶽山登山。工学校開校、ダイバース来日。	7. 兼平電綫が岩木山登山。
1874年	明治7年	開拓使仮学校、ライマン(アメリカ)が大雪山から十勝川を下流し、石狩川の水質調査を行う。ライン(ドイツ)が男体山・白山登山。外国人内地旅行允許条令。アトキンソンが来日。	内務省地理局設置、三角測量を開始。
1875年	明治8年	5. 農芸家A. F. ジェフリーズ(イギリス)らが残雪期の富士山登山。デーニツ(ドイツ)の男体山・富士山登山。ナウマンが碓氷峠～浅間山踏破。W. ガウランドとディロンが立山・焼岳登山。11. ナウマンが浅間山調査。「外国人旅行免状」改正。東京気象台設立。	
1876年	明治9年	7. ナウマンが針ノ木峠から室堂へ調査登山。「外国人入京免状」の交付を大阪府・兵庫県に委任。	
1877年	明治10年	1. 工部省工学者のミルン(イギリス)、ナウマンらが噴火後の三原山を調査。7. E. モースが男体山登山。W. ガウランドとディロンが乗鞍岳、槍ヶ岳登山。7. サトウがディキンズとともに富士山登頂し、9. 浅間山、標名山、白根山などを踏破。8. ミルンが火山視察のため岩手山登山。「外国人湯治免状」の交付を神奈川県に委任。工学校を工部大学校と改称。東京大学開設。	
1878年	明治11年	7. E. キンチ(イギリス)が針ノ木雪渓を観察。7～8. E. サトウとホーズが信州から針ノ木峠越え、御嶽山登山。7. ガウランドが槍ヶ岳登山。	内務省地理局、農商務省山林局・地質研究所、参謀本部陸地測量部などによる地図測量登山が本格化。
1879年	明治12年	アルキスト(スウェーデン)の富士山・六甲山登山。7～8. ミルンが鳥海山・月山・磐梯山・岩木山・阿蘇山等を調査。ノンデンシールドが草津から浅間山登山。7～8. アトキンソン、ディクソン、中沢岩太が八ヶ岳、白山、立山登山。8. ダイバース、マーシャルが針ノ木峠、有峰村を踏破。	内務省地理局の測量方、梨沢晴起、寺沢正明が赤石岳を偵察。(1881年三角点設置)
1880年	明治13年	フォーリー(フランス)の岩木山・伊吹山登山。メンデンホール(アメリカ)・チャップリンらが4日間かけて富士山頂にて気象観測を行う。(富士山での初気象観測)ミルンらが地震調査研究を開始。ミルンが講演でガウランドの立山登山を紹介。	
1881年	明治14年	ホーズが鳳凰山、甲斐駒ヶ岳に登頂。7～8. サトウとホーズが金峰山、秋葉山、間ノ岳を踏破。サトウ・ホーズ共著による『中部及び北部日本旅行案内』(第1版)が刊行。アトキンソンが立山の情報を提供。	9. 高橋白山、伊藤瀬平による甲斐駒ヶ岳登頂。
1882年	明治15年		6. 三原昌らによる甲斐駒ヶ岳の三角点選定登山。明治政府・教部省布達により修験道が復活。地質研究所の横山又次郎らが南アルプス三峰川周辺を調査。
1883年	明治16年	ナウマンが富士山にて地質調査。	2. 日本での天気図作成が開始。8. 窪田畔夫、渡辺敏ら9名が大雪山から白馬岳登山。
1884年	明治17年	サトウ・ホーズ共著による『中部及び北部日本旅行案内』(第2版)が刊行。同書で前年より針ノ木越えルートが通行困難となったことを紹介。ライン(ドイツ)が『日本』を刊行。(立山・針ノ木峠に言及)	陸軍参謀局製の20万分の1暫定図が発売。地質研究所の中島兼造らが赤石岳登山。
1885年	明治18年	上海の人・フランシスが大門側から針ノ木峠を越えようとしたが失敗。	5. 松浦武四郎らが大峰山脈、大普賢岳を踏破。8. 竹内泰臣(隊長)ら森林資源調査団が白馬岳から立山一帯を調査。
1887年	明治20年	クニッピング(ドイツ)が3日間、富士山頂で滞在観測。	8. 田中阿歌麿がアルプスのピッツ・セントラルに登山。松浦武四郎が富士山登山。旧富士藩士、小杉復堂が富士山、日光白根山、御嶽山、乗鞍岳、大蓮華山(白馬岳)登山。
1888年	明治21年	4. W. ウェストン初来日し、神戸に居住。(明治27年まで日本に滞在)	
1889年	明治22年	5. P. ローエルが能登旅の帰途に針ノ木峠越えを試みるが断念。	8. 平野長蔵が燈ヶ岳登山。9. 大塚専一らが信州から針ノ木峠を越え立山登山。さらに鹿島槍ヶ岳～白馬岳～雪倉岳を踏破。
1890年	明治23年	W. ウェストンが富士山、祖母山登山。	
1891年	明治24年	7～8. W. ウェストンが浅間山登頂後に槍ヶ岳を目指すのが断念し、御嶽山、木曾駒ヶ岳に登り、10. 濃尾地震後の富士宝永山登山。チェムバレン・メイソン共著による『中部及び北部日本旅行案内』(第3版)がマレー社より刊行。同書に「針ノ木峠越えルートは最も経験を積んだ登山者でなければ困難である」と言及。8. デ・レイケが娘ヤコバ(13歳)とともに立山登山。	9. 陸地測量部の矢鳥守一らが甲斐駒ヶ岳を測量。9. 東京英和学校の安藤準平らのパーティが木曾駒ヶ岳濃ヶ池にて遭難。
1892年	明治25年	5. W. ウェストンが残雪期富士山登山。8. ミラーとともに乗鞍岳、槍ヶ岳登頂。ミラーと別れ、後赤石岳への登頂、富士山下りを行う。	福島安正少佐、シベリア横断。(～26年6月)
1893年	明治26年	W. ウェストンが恵那山、天竜下り、富士山登山。大門側から針ノ木峠を越えて立山登山。さらに徳本峠から前穂高岳登山。(案内人: 上条嘉門次)	7～8. 陸地測量部の館澤彦らが白馬岳、前穂高岳、御嶽山、八ヶ岳へ測量登山。8. 木暮理太郎が王滝口から木曾御嶽山登山。
1894年	明治27年	W. ウェストンが大蓮華(白馬岳)、笠ヶ岳、焼岳、常念岳、御嶽山登山、富士山下りを行う。	4. 木暮理太郎らが積雪期の蔵王連峰を横断。館澤彦らが乗鞍岳、立山、木曾駒ヶ岳を測量。9. 小西文之進ら40数名で水長沢山に登頂後、尾瀬ヶ原に下り調査。10. 志賀重昂著『日本風景論』が刊行。

安川茂雄『近代日本登山史』(あかね書房、1969年)、山崎安治『新稿日本登山史』(白水社、1886年)、遠藤甲太・池田常道編『日本登山史年表』(山と溪谷社、2005年)などを基に作成。